

サルの調教過程に於ける芸修得上の要点の観察と理解

村崎修二(猿舞座)
藤広富夫()
登根光雄()
村崎知雄*()
勝川良一*()

*共同実験者

研究所の共同研究者との事前協議の結果、カニクイザルにつき、猿舞師五月三郎師の調教技術を習練中の村崎知雄の参加もえて、11月初旬より1月下旬までざっと3カ月余、犬山に於いて調教を行なった。カニクイザル(クロベエ)の調教の重要な節目について、研究所の岩本教授等と適時打ち合わせをはかりつつ、筆記、写真、カメラ、八ミリ映像等による記録化を進めた。

11月初めより12月初めまではいわゆる「ナラシ」の段階をとり、サルの対人関係より生じる精神的不安、肉体的緊張を和らげ、解放することにつとめた。首輪をつけ、ならすこと10日。環境変化による風邪をこじらせたが、体力をつけることに関連する五月師伝承の食事法にて、全快。1カ月間は、主な日課は散歩。調教師が体に触っても恐れないように遊びにさそいつつ、徐々にならしていった。

12月6日より、基本芸、タチマワリ(二足歩行)に移る。最初、指をにぎらせて歩かせ、なれると次に棒にきり替える。10日間で歩くこと、立つことに次第になれてくる。何を今しなければならぬか、はっきりわかるようにまきかえし、くりかえし訓練をくりかえした。

少しでもうまくゆくと即座にほめる。体をさすり、休むことを重視。同じ行動を連続させると飽きてきて、注意の集中が散漫になることに気をつける。新しい別のことに注意も向けながら、再び二足歩行訓練に入った。訓練に身が入るように合図の明確な指示、タイミングを調整すること、ヒト、サルの心理の同位同質が行動様式の獲得に不可欠なことを考えると、この間の訓練が最も重要である。サルをしかりつけたり、サルにかみつく、たたく、エサをやらないといった方法は一切とらず、あくまで、サルとヒトの心理のゆくえ行動の一致、納得のうえに、つまり関係樹立を原動力にねばりづよく目標を追求する「ヤワ仕行み」

の調教法で徹底してのぞんだ。

20日間で、ほぼひとり歩きが可能となった。しかし、これではまだ猿舞の基本「立ちまわり」は完成していない。精神的安定と歩行の安定、見事さはこの段階から更に2カ月余の毎日の訓練の末獲得される。古人も言っているように、立ちまわりには少なくとも3カ月はかけなくてはならない。

研究所関係者との事後協議によって、ひきつづき58年度も調教を続行継続し、ニホンザルの調教による比較も含めた更に突っこんだ調査、記録化を展開してゆきたい。

課題 14

ニホンザルにおける初期行動と母子相互作用の時間構造

鳥越隆士(広大・教育)

ニホンザルは出生直後からいかにその環境に働きかけ、その影響をうけるようになるのか。次の3点から検討した。(1)姿勢や移動様式のトポグラフィの発達的变化、(2)手指等による対象操作の発達的变化、(3)(1)、(2)の生起contextとしての母子関係や他個体との社会的関係の発達的变化。

観察対象は嵐山D群(霊長研第3放飼場)内で1982年に出生した個体7頭(オス3頭、メス4頭)で、1日令から6カ月令までfocal animal sample法で行動観察を行なった。

姿勢や移動様式の発達過程は3~4週令と2~3カ月令で大きく3期間に分けることができた。各期間に出現、発達、安定化するトポグラフィは第1期はwalk, 6-point sit, 第2期はclimb, hang, 4-point sit, runであった。第3期には、これらが複雑で多様なシークエンスとなり、特にpeerとのwrestleが頻ぱんに生じた。手指等による対象操作の発達も(1)の期間区分に対応していた。コザルはまず口により環境への働きかけを開始するが、第2期では、対象に対する口による接近から手による接近に移行する。対象を手でつかみ口へ運ぶ、とりだして見る、地面や壁にこすりつける、さらには、4-point sitの出現とともに両手による対象操作が出現した。第3期では、これらのトポグラフィを基礎に複雑で多様なシークエンスが形成された。また多くの場合、peerとの相互交渉のcontextの中で出現した。母子相互作用